春はみやこの雪路まで此頃よりそや
翁は俳乃諸門のあるじなりしが静かに世の
道此翁は金葉乃変りなしと言ふ友のきり
あんはは先の庄子濃ひ中さんとあるの雪
竹おあけ嫁さけなくして俳の鶯嬉子楷
うらかき梅て空風おいさまりぬ以て年に
年よりしきよろ笑ひあひて

若かりし わか 水の油流れ人の雪　如毀
とか老年は旅句に

高山乃雪 嫁かき ねふけ 春　龍門

かくて其之四句めよ句と綴るて及る光
陰矢のや年は宮院よ老らくしけ

若草ふる 我とい翁の 雛壺の鶯　如毀

こともしは新らしく小田月のおめ毀老人の
お存よ枝るぬきけは家の直居子は老
あり年号知きしめとして休風士述と
東て雪お春しあるは百貞おる野き方
物らして風流を広むる枝からめ心絶
増して目出嬉りしうことも行て猶
も又え呂以る家はと見人は底寿の声
むくかりて以おかは以きのしく侍るとそ
むへ之名利

同ふ目出 以枝くの色 は毎ふ家寿の鶴　龍門

鶴齢ふ 春ふはて いや年の 宮　半岱

筆旦

初春の 若る谷の その様を　吐翠

一梅 柳若 水くれん 鉢の 雲　卓呂

一壽や 枝ある松 中の 初日の寿　李鶴

元日の 華 扇 のきりは 吉嫡く へ　直意

此春より小山お見るとて

蓬莱のは 万石の 松 すゑし　龍門

子のとし